高・大・一般　漢字（楷書A）

※楷書A、Bは段級をとわず両方出品も可。

雁塔聖教序（褚遂良）②

宮澤　鵞州

求慶

※落款（署名）には「**雀人臨**」と記しています。「**雀人**（雅号）」が**臨書**した、という意味になります。

――落款の記し方――

・臨書の場合は「○○臨」とします。
・他者の作った文・文章で、漢字のみの場合は「○○書」とします。
・自分の作った文・文章の場合は、「書」を省くことが多いです。
・右の「○○」には、自分の名（太郎・花子など）や雅号（雀人・清泉など）を記し、姓（鈴木・田中など）にはしません。

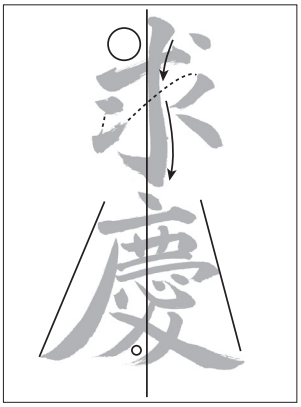
〈解説〉

褚遂良（596～658）は初唐の三大家の一人です。唐の太宗皇帝に仕え、王羲之の書の真贋を鑑定したとされています。王羲之の書を学び、虞世南と欧陽詢の書法に立脚しながらも晩年には「褚法」と言われる独自の書を確立しました。その代表的書が「雁塔聖教序」です。『西遊記』でおなじみの玄奘（三蔵法師）は、インドから持ち帰った仏典の翻訳をしました。その功績をたたえて、太宗と皇太子（後の高宗）は「聖教序」「聖教序記」を著しました。それを58歳の褚遂良が書き、碑に刻したものが「雁塔聖教序」（653年）です。穂先に抑揚を利かせた運筆で、楷書に行書的筆意を含ませ、虞世南や欧陽詢の楷書にはない書風を確立しました。

〈解説〉

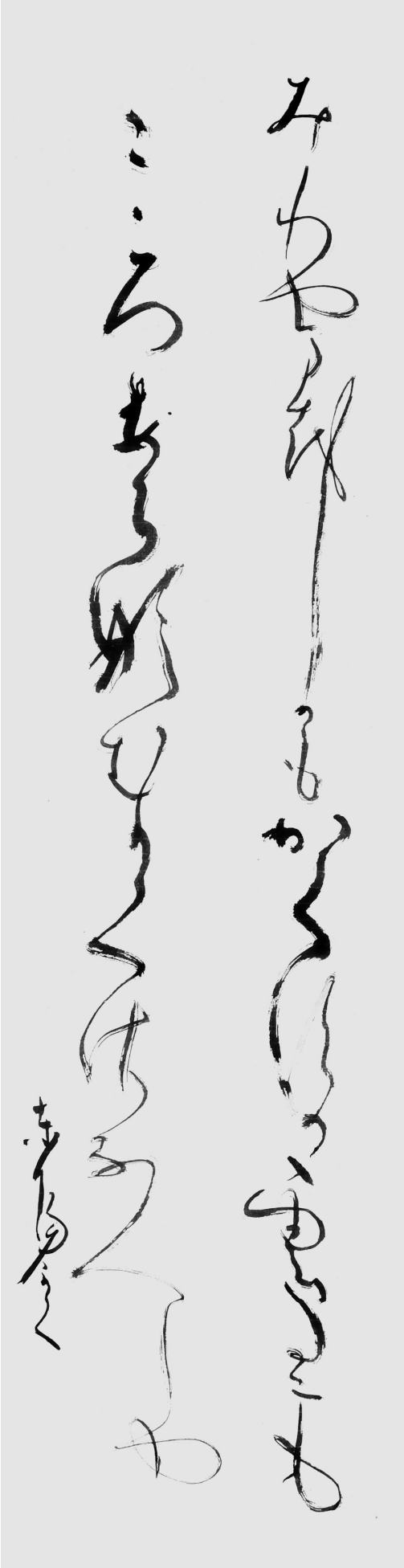
「求」…二画目は、単純な直線的縦画ではありません。逆筆で入筆して筆毛に弾力を与えて、S字カーブを描くように左右へ微妙に方向と筆圧を変化させながら、送筆します。

「慶」…画数が多いので、内部の点画を緊密に組み合わせることが大切です。そのため、筆先を立てて太さに注意して書きましょう。三画目の左払いと最終画の右払いが呼応するように意識することがポイントです。



高・大・一般　仮名

新(10)級から五段までは作品用紙として画仙紙八ッ切り（68cm×17.5cm）又は、画仙紙半切（136cm×35cm）の出品。六段から八段までは作品用紙として従来通り画仙紙半切（136cm×35cm）のみの出品です。



加藤　東陽

〈釈文〉 みわやまを（万越）　しかもかくすか（可　久須可）
雲だにも（多二）　こゝろあらなむ（那）
かくさふべしや（可久佐）

〈出典〉 万葉集 巻一―一八 額田王

〈歌意〉 三輪山をそんなにしてまで隠すのですか。せめて雲だけでも情があってほしいものを。隠してよいものか。

揮毫上の留意点

基本的な二行書きです。歌を口遊（くちずさ）むとリズムが湧（わ）いてきます。全体的に線の太細（たいさい）と緩急や潤渇（じゅんかつ）（濃淡）に留意しながら、空間を抱き込むように力強く書きます。

書き出しの「みわ」の連綿線は空中（意連）です。「み」から「わ」の一画目まで一気に書き、次にこの行の中心線がずれないように「や」の位置や大きさなどを考えます。

この行のポイントは「し可も」のリズムです。「し」を伸びやかに力強く書きます。また、行末の「雲多二も」は、二行目下方の「べしや」との呼応を考えて少し小さめに書きましょう。

「こゝろ」は、墨を置いていくようにゆったりと書き出して、「あら那む」は大小をつけてふところを広く書きます。

行の中心を次第に右下に移しながら歌意を意識して、渇筆で力強く書きます。